

2013年9月1日川越教会

どちらの道を選ぶとしても

[聖書] ルツ記 1章1～22節

士師が世を治めていたころ、飢饉が国を襲ったので、ある人が妻と二人の息子を連れて、ユダのベツレヘムからモアブの野に移り住んだ。その人は名をエリメレク、妻はナオミ、二人の息子はマフロンとキルヨンといい、ユダのベツレヘム出身のエフラタ族の者であった。彼らはモアブの野に着き、そこに住んだ。夫エリメレクは、ナオミと二人の息子を死に、その後、モアブの女を妻とした。一人はオルバ、もう一人はルツといった。十年ほどそこに暮らしたが、マフロンとキルヨンの二人も死に、ナオミは夫と二人の息子に先立たれ、一人残された。ナオミは、モアブの野を去って国に帰ることにし、嫁たちも従った。主がその民を顧み、食べ物をお与えになったということに彼女はモアブの野で聞いたのである。ナオミは住み慣れた場所を後にし、二人の嫁もついて行った。

故国ユダに帰る道すがら、ナオミは二人の嫁に言った。「自分の里に帰りなさい。あなたたちは死んだ息子にもわたしにもよく尽くしてくれた。どうか主がそれに報い、あなたたちに慈しみを垂れてくださいますように。どうか主がそれぞれに新しい嫁ぎ先を与え、あなたたちが安らぎを得られますように。」ナオミが二人に別れの口づけをすると、二人は声をあげて泣いて、言った。「いいえ、御一緒にあなたの民のもとへ帰ります。」

ナオミは言った。「わたしの娘たちよ、帰りなさい。どうしてついて来るのですか。あなたたちの夫になるような子供がわたしの胎内にまだいるとも思っているのですか。わたしの娘たちよ、帰りなさい。わたしはもう年をとって、再婚などできはしません。たとえ、まだ望みがあると考えて、今夜にでもだれかのもとに嫁ぎ、子供を産んだとしても、その子たちが大きくなるまであなたたちは待つつもりですか。それまで嫁がずに過ごすつもりですか。わたしの娘たちよ、それはいけません。あなたたちよりもわたしの方がはるかにつらいのです。主の御手がわたしに下されたのですから。」二人はまた声をあげて泣いた。オルバはやがて、しゅうとめに別れの口づけをしたが、ルツはすがりついて離れなかった。

ナオミは言った。「あのとおり、あなたの相嫁は自分の民、自分の神のもとへ帰って行こうとしている。あなたも後を追って行きなさい。」ルツは言った。「あなたを見捨て、あなたに背を向けて帰れなどと、そんなひどいことを強いないでください。わたしは、あなたの行かれる所に行き／お泊まりになる所に泊まります。あなたの民はわたしの民／あなたの神はわたしの神。あなたの亡くなる所でわたしも死に／そこに葬りたいのです。死んでお別れするのならともかく、そのほかのことであなたを離れるようなことをしたなら、主よ、どうかわたしを幾重にも罰してください。」同行の決意が固いを見て、ナオミはルツを説き伏せることをやめた。二人は旅を続け、ついにベツレヘムに着いた。

ベツレヘムに着いてみると、町中が二人のことでどよめき、女たちが、ナオミさんではありませんかと声をかけてくると、ナオミは言った。「どうか、ナオミ（快い）などと呼ばないで、マラ（苦い）と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。出て行くときは、満たされていたわたしを／主はうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い（ナオミ）などと呼ぶのですか。主がわたしを悩ませ／全能者がわたしを不幸に落とされたのに。」ナオミはこうして、モアブ生まれの嫁ルツを連れてモアブの野を去り、帰って来た。二人がベツレヘムに着いたのは、大麦の刈り入れの始まるころであった。

[序] 人の生涯から学ぶこと

9月に入りました。川越教会は今年 22 日に**永眠者記念礼拝**を行いますので、教会の記録を調べて、教会員の永眠者一覧表を作成しました。一応9人のお名前を挙げる事が出来ましたが、私の代になってからこの6年余に亡くなられた方はお二人です。このお二人の晩年は存知あげていますが、他の皆さんは、それぞれに、**どのような生涯を送られた**のでしょうか。またご遺族は今どのように暮らしておられるのか等々と思いをはせました。それぞれが神さまから頂いた命を大切に生きてきたに違いありません。その**人生から学ぶ**ことが出来たら、私たちにとってどんなに有難いことかという思いを深くいたしました。

私もいわゆる長寿者の仲間入りをして、生き始めています。幸い健康です。今晚から一週間シン

ガポールへ行って5日間各所で剣道の稽古指導をし、土曜日の昼に生徒の一人の結婚式に出席してから帰ってきます。このように日々を過ごせますこと、本当に感謝です。それにしましても、なんと多くの方々のお世話になり、助けられて来たことでしょうか。おかけしたご迷惑の数々を思うと身が縮みます。私が生きたということがどれ程のお役にたったのでしょうか。その評価は、誰がどのように下すのでしょうか

[1] ナオミの信仰

今日から二回、旧約聖書のルツ記を学びます。主人公のナオミは、大飢饉という災害に遭って、夫と住み慣れた生まれ故郷ベツレヘムを捨てて、異国に逃れなければなりません。しかもそこはユダヤ人が軽蔑し差別している民モアブの地だったのです。どうしてモアブを選んだのでしょうか。その地で夫エリメレクに先立たれてしまいました。でも息子二人が成長していました。その時三人でベツレヘムに帰ればよいのに、彼女は息子たちにモアブの娘と結婚させたのです。モアブの一員になりきって、生涯を送ろうとしたのでしょうか。ところが余り丈夫ではなかった息子二人も次々と死んでしまいました。

ここに至り、彼女は遂に二人の嫁を実家に帰して、自分一人ベツレヘムへ帰る決心をしました。ナオミの強い説得に、オルパは泣きながら実家に帰って行きましたが、兄息子の嫁ルツは「死ぬまでお母さんと一緒に」という決心を変えません。こうして「全能者が私を不幸に落とされた」と嘆くナオミとルツのベツレヘムでの生活が始まりました。

ナオミを知るベツレヘムの女性たちは、彼女の変わり果てた姿に驚きの声を上がりました。「あなたはナオミさんではありませんか」。ナオミは答えました。「どうか、ナオミ(快い)などと呼ばないで、マラ(苦い)と呼んでください。全能者がわたしをひどい目に遭わせたのです。出て行くときは、満たされていたわたしを／主はうつろにして帰らせたのです。なぜ、快い(ナオミ)などと呼ぶのですか。主がわたしを悩ませ／全能者がわたしを不幸に落とされたのに」。何という悲しい叫びでしょうか。ベツレヘムを出ていく時には、毎日の食べ物には欠乏していたものの、夫と二人の息子たちという家族と家や土地を処分したお金も持っていました。ところが20年近くもたった今は、夫、息子たちを失い、僅かな貯えしか持ち合わせていない老いの身です。「しかしこれが、全能者である神さまがお決めになった私の人生なので。」とナオミは語ったのです。

人生には、思わぬことが起こり、右に行くか左に行くかの**選択**に迫られます。ナオミは飢饉にあった時、夫に先立たれた時、息子の結婚、また息子たちにも先立たれてしまった時に、**重大な決断**をしなければなりません。そしてその全ての選択の結果が、ベツレヘムの友人たちを驚かせた、マラ(苦い)と呼ばれる**惨めな姿**だったのです。

あの飢饉の折には、誰もが食べ物に欠乏しました。でも他の地に逃れず、ベツレヘムの留まった人たちも多くいたのです。そしてその人たちが今元気に、ナオミを迎えているのです。ユダヤ人からすれば、あんなモアブ人の地に行ったから、エリメレクもマフロンもキルヨンも早死にってしまった

のではないかと思う人もいたことでしょう。せめてエリメレクが死んだ時に、息子たちを連れて帰って来ていたらという悔いを、ナオミ自身も抱いていたかもしれません。どうして息子を二人ともモアブの娘と結婚させたのでしょうか。

このように考えますと、ナオミは大事な人生の選択に**失敗を繰り返した**と言えると思います。しかしナオミは、「神さまが私をこのようなひどい目に遭わせ、不幸に落とされました」と語っています。自分の判断の誤りを棚に上げて、一方的に神さまを恨んでいるのでしょうか。多くの日本人ならば、自分をこのように不幸にする神など信じるに値しないといってその神を捨て、別の神を拝むようになるでしょう。ナオミの**信仰**は、どのようなものだったのでしょうか。

ナオミは、天地万物を創造し、世界をご支配しておられる**全能の神さま**を信じています。全ての事は神さまのご意志から出ているのだから、**その御心に従って生きていくという信仰**に立っていました。ですから飢饉を逃れてモアブに移り住んだことも、夫も息子たちが死んでしまったことも、すべてを**神さまの思し召し**と受けとめて、生きていくという信仰なのですね。あのヨブも言っています。「**主は与え、主は奪う**。主の御名はほめたたえられよ」(ヨブ記 1:21)。ナオミの言葉も、「それにしても神さま、貴方が私にお与えになっている人生は、何と苦く厳しいものでしょうか」という訴えだったのでしょ。

[2] ルツの信仰

一方ルツはモアブの家庭で育ちましたから、農業の豊作をもたらす神**バアル**を拝んでいたことでしょう。しかしマフロンと結婚し、ナオミと一緒に暮すうちに、ナオミの**優しい人柄**が、主なる神を信じる**信仰**によることを知り、同じ信仰に生きる者になろうと心に深く決めさせたようです。2章に、ルツが落穂拾いに出かけて、ボアズという人に親切にされたと報告をしています。それを聞いたナオミが「どうか、生きている人にも、死んだ人にも**慈しみを惜しまない主**が、その人を祝福してくださいますように」と言って喜んでいきます。このような言葉がスッと口から出てくるナオミの人柄がルツの心を捉えていたのでしょう。

ナオミが二人の嫁に、まだ若いのだから実家に戻って幸せになりなさいと説得した時に「**主の御手がわたしに下されたのですから**」(1:13)と語っています。これは打ち続くわが身の不幸を、**神さまの懲らしめの手**が自分に下ったと受け取っていることを現す言葉です。そうであればこそ、愛する嫁たちを自分の不幸にこれ以上巻き込ませてはならないと案じたのでした。娘の幸福を願う**母の心**が込められている言葉ですね。

しかしルツは、実家に帰るように繰り返し説得するナオミに答えました。「**あなたの民は私の民、あなたの神は私の神**。あなたの亡くなる所で私も死に、そこに葬られたいのです」(1:16～17)。これはこういうことでしょう。「**お母さんと私は一つです。だから私はモアブ人ですがユダヤ人と一つです。お母さんの信じる神さまを私も信じています。お母さんと私は一つです**」こうしてルツはナオミと一つになってベツレヘムで暮らし始めたのでした。

そして**落穂ひろい**がきっかけとなり、ナオミの夫エリメレクの近い親戚**ボアズ**と**ルツ**が結婚することになり、**オベド**が生まれ、やがてその孫**ダビデ**が生まれます。そしてその子孫として 1000 年後に**イエス・キリスト**がベツレヘムで誕生したのです。旧約聖書に記された律法には、「アンモン人と**モアブ**人は主の会衆に加えることはできない。十代目になっても、決して主の会衆に加わることはできない」(申命記 23:6)とあります。しかし新約聖書の冒頭キリストの系図には「ボアズは**ルツ**によってオベドを」(マタイ 1:5)と記されています。

こうして、**人種の差別・偏見**を取り除き、世界中の人々が愛によって一つに結ばれていく**キリストの救い**の先駆けが、ナオミ、ルツ、ボアズの結びつきを記すルツ記に、美しく証されることになりました。

[結] 神さまに用いられたナオミの生涯

どうしてエリメレクとナオミは、モアブになど移住したのでしょうか？ どうして夫が死んで二人の息子と残された時に、ナオミはベツレヘムに帰って来なかったのでしょうか？ またどうしてナオミは、息子たちに**モアブの娘**と結婚させたのでしょうか？ そして息子を二人とも失ってから、やつれ果てた姿でベツレヘムに戻って来たのでしょうか？

息子たちは 10 年ほどの結婚生活で、子供を授かっていません。しかし嫁と姑という難しい人間関係にもかかわらず、ナオミと二人の嫁とは仲良く暮らしました。殊に兄嫁ルツはナオミとの生活を通して、信仰が育ち、成長していったのです。そして夫と死別する悲しみの中で、ナオミを支えて共に生きていこうと固く決意するまでになっていたのです。ルツの信仰の成長のためには、ナオミの許でのこの 10 年の年月が必要だったのです。

私は先程、マラと呼んでほしいと嘆く惨めな姿は、ナオミが**人生の判断を誤った結果**だと申しました。しかしキリストに至る系図の中に、オベドを生んだ**モアブの女ルツ**の名を見いだす時、そのルツを育てたナオミの**貴重な役割**が分かってきました。そして私たちの人生には、人間の知恵や判断を超えて、**神さまの大きな計画と導き**があることを改めて思わされました。

ナオミは「主の(こらしめの)御手がわたしに下された」とか「全能者がわたしを不幸に落とされた」と歎きました。しかし晩年になり、ルツがオベドを産んだ時、ベツレヘムの女性たちは、ナオミに言いました。「その子は**あなたの魂を生き返らせる者**となり、老後の支えとなるでしょう。**あなたを愛する嫁**、7人の息子にもまさるあの嫁がその子を産んだのですから」。こうしてナオミの人生は、神さまの大きな祝福をもって閉じることになったのです。

新約聖書でパウロも言っています。「ご計画に従って召された者たちには、**万事が益となるように共に働く**ということを、わたしたちは知っています」(ロマ 8:28)。そうです。どんなに厳しい困難や悲劇でも、**後から顧みる時**、そこにも主なる神さまの深い計画、配慮が あつてのことだったと分か

ってくるのです。

私たちも人生の岐路に立たされて、さてどの道を進むべきか決断を迫られた時には、その時の自分の信仰の量りに従って、精一杯にお祈りして選びとりましょう。神さまは私たちの決断を超えて、必ず御心によって、私たちを導き、お用い下さるのです。

とんでもない判断をしてしまったと、深い後悔にさいなまれることも起こるでしょう。でも**万事が益となるように共に働く**という信仰に立って、御心を尋ねつつ、神さまに信頼して一步一步進んでいきましょう。私たちの**人生の評価**は、神さまがなさってくださいます。そしてそれで十分なのです。

完